

ストーリー「日本国創成のとき～飛鳥を翔（かけ）た女性たち～」

古代飛鳥は女性を受容した新進の時代であったと言っても過言ではない。複数の女帝が誕生し、豊かな感性で、政治にかかわったのも古代飛鳥であり、宗教や文学においても女性たちの活躍を抜きにしては語れない。なぜ国が誕生する時に、女性の存在が大きくなるのであろうか？なぜ、古代において女性がこのように力強く活躍したのであろうか？その答えは、「飛鳥」にある。

女性が国づくりの原動力

日本で初めての女帝であった推古天皇は、巫女（シャーマン）的要素を備えつつも、仏教の興隆に力を注いだ。従来どおり神々が宿る自然を厚く敬いながらも、新しい仏教を取り込み、いわば神仏が調和した国づくりをはじめた。そして、東アジア世界と正面から向き合った女性でもある。このような女性の力は、次の女帝・皇極（斉明）天皇にも受け継がれている。八十万の神々が坐す霧囿気が残る奥飛鳥には、女帝が雨乞いをしたという伝承が残り、自然と一体となってその能力を発揮した。斉明天皇として再度即位した頃からは、飛鳥の大開発を牽引していくようになり、その記憶は多くの遺跡や景観として現代にも伝わっている。その思想的背景には、仏教と共に神仙思想が融合したものであり、女帝の圧倒的な意思と指導力がここに垣間見える。激動の時代を経験したことが、女帝の心に大きく響いたのであろう。そして、この国づくりを完成させたのが、持統天皇と夫の天武天皇であった。持統女帝は、夫・天武の国づくりの意思を継いで、「藤原京」を完成させ、大宝律令を制定させた。ここに「日本国」を誕生させたのである。

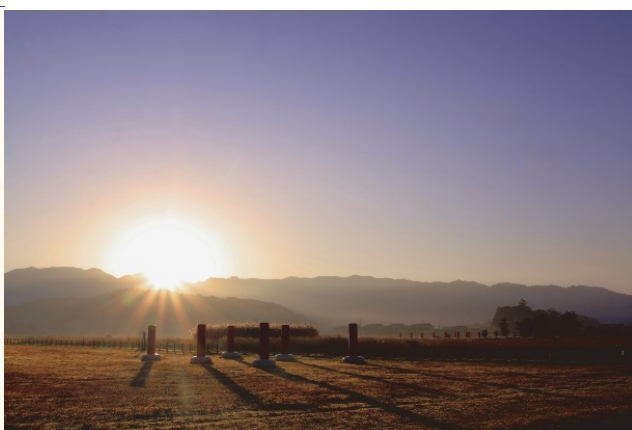
このように、女性が本来持つ神仏と共感する巫女的な要素と、内に秘めた強い力が、国づくりの原動力となった。



女性が輝く仏教興隆と万葉の歌

女性の活躍は、政治だけでなく、宗教や文化の面でもみられる。仏教興隆の先駆者となった我が国最初の僧は、驚くべきことに11才で出家した善信尼と呼ばれる女性であった。彼女は戒律の法を学ぶために百済に渡り、帰国後には、多くの女性を尼僧として得度させた。このことも、古代の女性に巫女的な要素が多く備わっていたことと無関係ではないだろう。

また、『万葉集』には、持統天皇や額田王など、多くの女性歌人たちの歌が載せられている。たとえば古代の中国では、女性の立場になって男性が詩歌を詠むことはあっても、日本のように女性が実質的な文化の担い手とはなり得ていなかった。女性が実際に詩歌を詠み、それが残されていることから、古代日本は女性の時代であったといえるだろう。そこからは、古代の女性たちの生き生きとした声が聞こえてくるようである。



新しい国の“かたち”

このように、飛鳥の女性を語ることから、日本が「国家」として歩み始め、東アジアを通じた世界観が見えてくる。飛鳥時代を牽引したのは女性であった。彼女たちの手によって、政治・宗教・文化の各方面で、我が国の新しい“かたち”が産み出されていった。「日本国」誕生に関わった女性の活躍をみると、世界の中でのこれからの新しい国の“かたち”に、女性の“ちから”が注目される。



(持統天皇 吉野行幸の再現)